

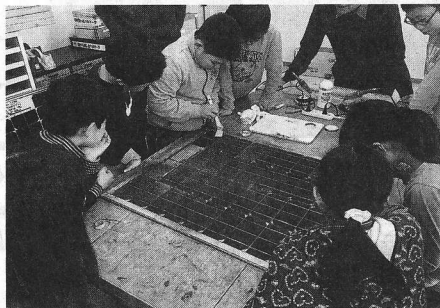
「震災の時、世界の人が福島を応援してくれた。今度は私たちが応援してあげたい」。福島の子どもたちからのメッセージと、七十才角、六十八才のソーラーパネル三枚を手に、いわきおてんとSUN企業組合の再エネ事業部長である島村守彦が五月十日、ネパールへ向かいました。昨年四月の地震で被災し

東北復興日記

まだまだ



▶▶▶ 190



いわきおてんとSUN
企業組合代表

吉田恵美子さん



希望の灯りネパールに

たネパールの学校に、福島から希望の灯り^{ホッポ}を届けるためです。

届け先は、ティストウン村とカトマンズ市内の小学校。

両校とも震災で二階部分が倒壊し、一階も壁が崩れ、ブルーシートで雨風をしのいでいる状況でしたが、そんな中子どもたちは学び続けているのです。

企業組合では昨年度、福島県の助成を受けて、県内の子どもたちを対象にソーラーパネル手作り教室を二十回近く開きました。発電の仕組みを学び、ハンダゴテを使い、半

導体セルを一枚一枚つなげて自分たちの手で電気を生み出す実験を行いました。写真。

一年間で四百人以上が参加し、中にはおばあちゃんに連れられた四歳の女の子がハンダゴテを握ったこともありました。仕上がったパネルは、

外灯のない校庭の一角に設置されるのが一般的ですが、「有効に活用してほしい」と組合に委ねられることもあり

ました。その活用の一つが、ネパールへソーラーパネルによる灯りを届けるというものでした。

実現の手助けをしてください

ったのは登山家の栗城史多氏です。栗城氏より紹介いただいた在日ネパール人のシギヤン・クマル・タパ氏の協力もあり、海外支援では最も大きな課題である現地の受け入れ態勢が短期間に整い、設置する小学校の校長、地域の住民が訪問を歓迎してくださいました。福島の子どもたちの思いは無事に届けられました。今は夏休み。自由研究に取り組み子どもも多いでしょう。ぜひ、こんな体験の機会を全国の子どもたちに与えられたらと思います。

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組み「結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。